
仮面ライダーディシジョン

ウボァー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディシジョン

【Nコード】

N2612X

【作者名】

ウボアー

【あらすじ】

一年の天気が雷雨という異質な都“雷都”。

この街に住む左翔太郎の双子の弟“左翔二郎”。

彼は探偵、科学者、そして仮面ライダーディシジョンなのである。

・・・こんなあらすじでいいのだろうか↑あらすじとは関係ない

注意：一話一話が非常に短いです。ご了承ください。

ブローグ 2008年9月某日 22時00分(前書き)

ひょっとしたら描写の間違いがあるかもしれませんが、その時は報告お願いします。

ブローグ 2008年9月某日 22時00分

2008年9月某日 22時00分

都会から遠く離れた孤島にあるビルの最上階。

ここには二人の青年と二人の男がいた。

二人の男の中で白いソフト帽を被った方の男は、目の前にいる少年の手を掴み、肩を組んだ。

すると、急にビルの警報が鳴り響き、窓からはヘリコプターの明かりが差し込んできた。

「おやつさん!!」

青年は、ソフト帽の男に向かって叫ぶと、急いで男の方に向かった。煙草を吸っていた男も危険を察知し、最上階を出ようとした。

しかし、気づけば謎の黒服達に周りを囲まれていた。

「俺が足止めをする。お前らはとっとその子供を連れていけ」

煙草の男はそう言い、上着のポケットから何かを取り出し、そして“変身”した。

右手首に着けておいた小型カメラのスイッチを切って。

なぜ男がそんな物を着けていたのかは分からない。

一方ここ、“雷都”にある探偵事務所では。

「おい！探偵！てめえ何勝手にスイッチ切ってた！おい！おい！おい！」

相棒の帰宅を待つ、一人の科学者がいた。

ライダーの設定（前書き）

他にもライダーが出てきたら追記します。

ライダーの設定

仮面ライダーディシジョン

スペック

- ・パンチ力：7トン
- ・キック力：10トン
- ・走力：100mを2秒

武器

- ・ディシジョンサイズ（大鎌）

柄の色は黒で、柄の下にマキシマムスロットが付着

- ・一振り12トン

詳細

- ・左翔二郎が“審判の記憶”を宿したガイアメモリ“ディシジョンメモリ”をロストドライバーに装填して変身
- ・Wと同じくWの触角
- ・複眼の色は紫
- ・体色は白で、肩、肘、膝に黒の装飾がしてある
- ・ディシジョンサイズは翔二郎の意思によって出現と消滅が可能
- ・Wが“風都の涙を拭うハンカチーフ”ならディシジョンは“雷都の審判者”
- ・他にも“白い死神”という異名がある

キャラ設定（前書き）

新キャラや物語の内容で新たな事実が出てきた時に更新します。

2011年10月31日 更新

キャラ設定

左翔二郎 年齢：左翔太郎と同じ 職業：探偵と科学者
この物語の主人公。

左翔太郎の双子の弟。

『デিশジョン』のガイアメモリを持ち、仮面ライダーデিশジョンに変身する。

雷都で探偵事務所を開いており、その一方で色々な物を発明している。

元々は相棒がいたようだが、その相棒は・・・。

翔二郎の相棒（今のところ本名不明）名字：草野 年齢：48歳

職業：探偵

翔二郎の相棒であったが、2008年の9月某日に行方不明になった。

変身能力を持っているようだが、今のところどのような用途で変身するのか不明（恐らくガイアメモリで変身する）。

雷都の探偵事務所はこの男が開いていたらしい。

常に煙草を吸っている。

名字は草野。

平井大介 年齢：27歳 職業：警部

若くして警部になったエリート。

卵が何故か割れない。理由は不明。

翔二郎に何か作ってもらった。

草野の事を知っている。

依頼編（前書き）

ついに本編投稿。

誤字などがあったら感想欄に書いてください。

依頼編

第一話 Dの記憶／三つの顔を持つ男

ここは一年中雷雨が降っている“らいと雷都”。
何でこうなったのかは誰も知らない。

―2009年9月1日 雷都 15時00分―

雷都にある探偵事務所。

この探偵事務所を訪ねる二十歳の青年“みずのりょう水野亮”がいた。

水野は、探偵事務所のドアを叩いた。

しかし反応がないので、もう一度ドアを叩いた。

また反応がないので、声を出す水野。

「依頼です！入ってもいいですかー！」

反応なし。

「入りますよー！」

そう言い、中に入る水野。

そこには、科学者のような服を着た二十代前半ぐらいの青年が何かを作っていた。

「よし・・・こいつの名前は『全自動卵割り器』だ！」

「・・・」

「あれ、どちら様ですか？」

「・・・依頼です」

「ああ依頼ですか！少々お待ちください」
「はい」

と言い、部屋にあったソファに座る水野。
青年は部屋にあったドアを開け、別の部屋に行った。
おそらく着替えに行ったのだろう。

「・・・」

特に何もすることがないので、とりあえず部屋を見回す水野。
部屋はそこそこ整頓されており、これといって目立つものは無かった。

・・・先程の青年が座っていた本の山を除けばの話だが。
目を凝らすと、そこには『事件ファイルN0・1』と書かれたものもあれば、『発明品ファイルN0・1』と書かれたものもある。

「（あの人は今まで多くの事件を解決したのだろう）」
と、水野が推測していると、その隣に、『代理探偵 左翔二郎』と書かれたプレートが置いてあった。

「（一体なぜ？元々は誰かがやっていたのかな・・・？）」
水野が不思議に思っていると、部屋のドアが開いた。
先程の青年が服を変えてその場にいた。

「お待たせしました！」

「あ、いえいえ」

「何か飲みます？」

「いや、いいです」

上のようなやり取りを終え、丁度向かい側にあったソファに座る青

年。

「・・・で、依頼は何ですか？」

「はい。・・・兄を探してほしいんです」

「そうですか。警察には相談したんですか？」

「一応しました」

「分かりました。・・・自己紹介がまだでしたね。俺は“ひだりしょうじろう左翔二郎

”です。副業で科学者もやってます。あなたは？」

「水野亮です（副業で科学者！？この人凄いんだなあ・・・）」

「水野さんですね。・・・じゃ、質問します」

と言いながら、ポケットからメモ帳を取り出す翔二郎。

長いので質問のシーンはカットします。

「「ちょ」「

数分後、翔二郎のメモ帳にはこう書かれていた。

『依頼人・水野亮（20） 男性 職業：大学生

依頼内容：兄の水野武（みずのたけし22）を探してほしい。

依頼人によると、水野武は数年前、受験した大学に全て落ち、それ以降は毎日自宅で引きこもっているとの事。

全く、落ちたなら落ちたで就職しろと言いた（以下作者が自粛）

しかし、数日前から突然姿を消した。

推測だが、これは数日前から突然起きたドーパント事件に関係していると思われる。

いずれにしろ、早い内に解決しなければならぬ。

2009年9月1日 左翔二郎

「（大体こんなもんか）さて、質問も終わったことですし、帰って

いいですよ」

「分かりました。・・・左さん、なるべく早く解決してください。お願いします」

「はい・・・」

そして、水野は事務所を出て行った。

「（・・・一年たっても慣れねえなあ。探偵の仕事は）」

水野が出て行くと同時に、声には出さず愚痴を言う翔二郎。

「（一年といえば、そろそろ探偵がいなくなつて一年だな。・・・今月で）」

翔二郎は自分が探偵にも関わらず、おかしなことに別の人物を探偵と言っている。

まるで、一年前までその人物が探偵をやっていたかのような口ぶりだ。

「本当、どこに行っちゃったんだ・・・探偵」

その一言を、翔二郎は声に出して言った。

調査編（前書き）

翔二郎が前の話で言っていた“探偵”の名字が明かされます。

調査編

―同日 雷都 16時00分―

「さて、行くか」

翔二郎はそう言い、自作の自転車に乗った（黒いレインコートを着ている）。

“仮面ライダー”とタイトルにあるのに、バイクに乗らないのはどうかと思う。

「俺の勝手だろ」

まあそうだけどさ。

―同日 雷都 16時10分―

翔二郎は、『KEEP OUT』と書かれたテープの前にいた。テープの向こう側は、建物が焼失していた。テープの向こう側にいた人物に声をかける翔二郎。

「ヒラー。例の物持ってきたぞー」

「翔二郎か。こいつは通していいぞ」

「「はい！」」

どうも、と言い、中に入る翔二郎。

ヒラと言われた人物の名は“平井大介^{ひらいだいすけ}”。あだ名はヒラ。年齢は27歳。名字とあだ名に似合わず、若くして警部になったエリートだ。

「で、例の物は？」

「焦るなよ。ほれ」

「これが『全自動卵割り器』か。俺は卵がどうしても割れないんだよなあ」

「（お前が言うのと笑えるな）」

「ほれ、仕事代」

「おう。・・・今度の大学で何回目だ？」

「確か六つだ。って、何でそんなこと聞くんだ？」

「仕事と関係してるんだよ」

「あー成程。にしても、今度のドーパントは働き者だな」

「この十日間で六つも大学を焼失させてるからな」

ここでドーパントが何者なのかを説明しないと、永遠に説明する機会を失うと思うので説明をする。

ドーパントとは、人がUSBメモリのような形のガイアメモリという物を体の一部に差し入れ、その姿を化け物に変えたものである。

「メモするか」

翔二郎は、メモ帳―探偵事務所で使ったのとは別物の物だが―を取り出した。

表紙には、『ドーパントファイルNo.1』と書いてある。

翔二郎はメモ帳にこう書いた。

『ドーパントの攻撃跡を発見。

大学が焼失していることから炎系のドーパントと思われる。

2009年9月1日』

「・・・そっいや、草野さんはまだ見つかってないのか？」

平井がいきなり言った。

「・・・探偵ならまだ見つかってない」

「そうか。・・・行方不明になって一年だな」

「そうだな。・・・警察はまだ探してるのか」

「いや、・・・既に死亡扱いになってる。まあ生きてるだろうけどな」

「マジで死んでるかもな」

「縁起でもない事言うなよ。・・・何してるんだか、あの人は」

「どっかで煙草でも吸ってるんじゃないの」

「だといいけどな」

「・・・じゃあな」

「おう。今度も何か作ってくれよ」

「ああ」

翔二郎はそう言い、探偵事務所に帰った。

調査編（後書き）

感想待ってます。

推理 & a m p ・変身編（前書き）

ついに変身シーンキター！

推理 & a m p ・ 変身編

― 雷都 探偵事務所 16時30分 ―

「（さて、調べたことをメモするか）」

探偵事務所に帰り、例の『事件ファイルNo.1』や『発明品ファイルNo.1』が置いてある机の近くの椅子に座ってメモをする事にした翔二郎。

『まず、依頼人は水野亮。兄の水野武を探してほしいという依頼だった。』

水野武は数年前大学に落ち、以降は働きもせずに引きこもっていた。しかし数日前に突然姿を消した。

数日前という点で一致するのは数日前から起きている『連続大学焼失事件』だ。

俺は現場に行き、この目で大学が完全に焼失していることを確認した。

この事から、大学を焼失させたドーパントは炎系のドーパントと断定。

恐らく水野武は、この事件に関わったか、もしくは犯人のドーパントと思われる。

もし犯人だった場合、どのようにガイアメモリを入手したかは不明』

「・・・こんなもんか」

調べた事をメモした翔二郎。

「（水野武が犯人だった場合、次も大学を焼失させるだろう。だったら、まだ燃やされていない大学が危険だ。」

その大学を見張るか」

椅子から立ち上がり、隣の部屋に入った翔二郎。

「（・・・ドーナツを倒すにはあれが必要だが・・・どこ行つた？
探すしかないが探すのには時間がかかるな。

この部屋じゃ）」

部屋は、・・・整理整頓とはかけ離れていた部屋だった。

入ると同時に、足元には変な物（翔二郎曰く失敗作）が転がっており、一つの机の上（ちなみに何個もある）には資料や本の山。

先程の部屋の資料はほんの一部だったようだ。

壁には紙が貼りつけられており、最早紙の壁と言うにふさわしい。

別の机には起動したまま置かれてあるパソコンがある。

電気代が勿体ないと言いたい（翔二郎は事務所の屋根に当たる雨粒をなんかかんやで電気に変換している装置を作ったそうだ。雷が落ちると大きな電気になると言っていた）。

「よくここまで散らかしたものだ・・・今度掃除でもするか」
ぼやきながら翔二郎はあれを探す。

「見つけた・・・」

そして、翔二郎はあれを見つけた。

― 雷都 某大学前の道路 22時00分 ―

『ドゴォーン！』

「・・・雷か」

翔二郎は、あれを見つけてからこの大学に張り込んでいた。
相変わらずレインコートを着て、電柱に隠れている。

「（雷都で大学が焼失していないのはここだけだ。だったら、もうドーパントはここに来るしかない。・・・しかし、寒いな。

早く来てくれ。」

ドーパントを倒す前に俺が風邪で倒れるぞ。

・・・！）」

翔二郎が愚痴を言っている間に、誰かが来た。

その人物は、傘を差していて顔がよく見えなかった。しかし、声が依頼人の水野亮に似ていた。

「大学なんて・・・消してやる！」

「マグマ！」

「あいつか・・・」

翔二郎は、ガイアメモリの起動音を聞いた。

そして、人物は化物“ドーパント”に姿を変えた。

「全部燃やしてやる！」

「はっ！」

「!？」

そう呟くと同時に、翔二郎は“マグマドーパント”に飛び蹴りした。

「だ、誰だお前！」

飛び蹴りを受けたにも関わらず、少しよろめいただけで全く痛みを感じた様子がないマグマドーパント。

それどころか、翔二郎に質問している。

「（やっぱり効いてねえな）

人に名前を聞くときは自分から名乗るものだぞ。

そうたる水野武？」

質問を質問で返す翔二郎。

「――！何故俺の名前を知っている！」

「（声が弟さんに似ていたから……とは言えないな）
どうだっていいだろ。

それより、とつとメモリをよこせ」

「嫌だね！」

「そうか……だったら力づくで奪うしかないな」

「何言ってるんだお前？」

生身の人間がドーパントに勝てる訳が……」

「そうだな。

だが、あいにくこつちもただの人間じゃないんでね」

そう言うと、翔二郎はレインコートを放り捨て、懷から“ロストドライバー”とガイアメモリを取り出し、ロストドライバーを装着し、ガイアメモリを目の高さまで持った。

そのガイアメモリには、『D』のアルファベットが刻まれていた。

「デイシジョン！」

「変身！」

「デイシジョン！」

ガイアメモリを起動させ、ロストドライバーに装填し、翔二郎は“変身”した。

「まさかお前……ドーパントだったのか!？」

同じガイアメモリを使ったことから、ディシジョンをドーパントと予想したマグマドーパント。

「残念ながら、その予想は外れてる。

俺は・・・“仮面ライダーディシジョン”だ！」

そう答え、ディシジョンは武器の大鎌“ディシジョンサイズ”をマグマドーパントに向け、こう言った。

「さあ、お前の罪を審判する！」

推理 & a m p ・変身編（後書き）

犯人がマグマドーパントだった件について ↑

マグマだからすぐ雨で消えてしまうというツッコミは無しの方
向で
お願いします ↑

戦闘 & a m p ・ 完結編 (前書き)

サブタイトルにある完結っていうのはこれで一話が終わったっていう事です。

あと、かなり戦闘シーンが短いです↑

戦闘 & a m p ・ 完結編

「さあ、お前の罪を審判する！」

マグマドールパントにディシジョンサイズを向け、決め台詞を言ったディシジョン。

「だ、黙れ！お前なんか燃やしてやる！」

と言い、数十発の炎の球をディシジョンに向けて投げるマグマドールパント。

「いきなりかよ・・・まあ先手必勝っていう言葉もあるけどな！」
「ぐあっ！」

しかし、それを難なくディシジョンサイズで叩き落とすディシジョン。

しかも、数発マグマドールパントに打ち返している。

「今度はこっちの番だ」

「がはっ！うぐっ！」

マグマドールパントが体勢を崩している間に、ディシジョンサイズで攻撃するディシジョン。

その攻撃は斬るというよりも、挟むという感じだった。

一撃、二撃と、確実にダメージを与えていくディシジョン。

そして、マグマドールパントは最後にディシジョンが浴びせた一撃で吹っ飛んだ。

「くそっ・・・」

「何だ、あつけないな。」

まあ、ただ大学を燃やしていただけだから実戦は初めてみたいだけだな。

・・・そろそろメモリブレイクするか」

そう言い、ロストドライバーからディシジョンメモリを引き抜き、ディシジョンサイズのマキシマムスロットに装填するディシジョン。

「ディシジョン！マキシマムドライブ！」

「！来、来るなあ！」

マキシマムスロットからその音声が聞こえ、ディシジョンサイズの刀身が紫に光った。

そして、少しずつだが、確実にマグマドローパントにディシジョンは近づいていった。

まるで、死神が近づいていくように。

そのことに恐怖したのか、マグマドローパントは悲鳴をあげ、ディシジョンから逃げようとした。

しかし、既にディシジョンは目の前にいた。

「・・・ディシジョンスラッシュ」

罪人に判決を下すように、ディシジョンは言った。

そして、背を向けたマグマドローパントにディシジョンはディシジョンサイズを振り下ろし、メモリブレイクした。

いや、正確にはしたはずだった。

何故なら・・・

「グオオオオオオ!!」

「ぎゃああああ!!」

「・・・!?!」

突然ティラノザウルスが現れ、マグマドールパントを口の中に放り込んだからである。

当然、ディシジョンは驚いた。

「待て!」

とディシジョンが静止したが、ティラノザウルスは何処かに行った。

「・・・何処に行きやがった・・・」

と呟き、ディシジョンは変身を解いた。

戦闘 & a m p ・完結編（後書き）

どうでしたか？

びっくりするほどの中身の薄さでしょう↑

こうなったのはディジョンがチートすぎるからです↑
いやもう本当に。

次回の戦闘編はもうちょっと長くしたいです。

今回の依頼（前書き）

前話のあらすじです。

今回の依頼

仮面ライダーディジモン、今回の依頼は！

依頼人：水野亮（20）

「兄を探してほしいんです」

←
依
賴

探偵：左翔二郎（二十代前半）
↓
↓
↓
↓
↓
←

「本当、どこに行っちゃったんだ……探偵」 ←

← 依頼と結びつける ←

連続大学焼失事件

← 現場に行く

← その捜査 ←

警部：平井大介（27） ←

「そういや、草野さんはまだ見つかってないのか？」

連続大学焼失事件の犯人

マグマドールパント：水野武（22）

「大学なんて……消してやる！」

←
対決

仮面ライダーディジモン：左翔二郎

←
結果

「来、来るなあ！」

「・・・ディジショナルスラッシュ」

「グオオオオオオ！」

「ぎゃあ ああああ！」

「
・
・
・
!
?」

← 前回ラスト

「・・・何処に行きやがった・・・」

新情報編（前書き）

非常に短いです。

新情報編

第二話 Dの記憶／真犯人は・・・

― 9月2日 雷都 10時00分 ―

「ああ、『連続大学焼失事件』の犯人は依頼人の兄の水野武だ。ドーパントに変身して大学を燃やしていたんだ」
「そうか。」

で、昨日お前はそいつと戦ったという訳か」

「ああ。」

こつちも変身して戦ったが・・・あと一歩という所で」

「逃がしたのか？」

「いや、ティラノザウルスが邪魔をした」

「・・・ドーパントか？」

「そう考えるのが普通だな。」

ティラノザウルスなんてとつくの昔に絶滅してるからな」

翔二郎は、昨晚の出来事を平井に携帯で話していた。
ちなみにここは探偵事務所。

「ところで・・・ドーパントが水野武って言ったよな、お前」

「ああ」

「そいつ・・・今朝発見された死体の名前だ」

「!?!?・・・本当か？」

平井の言葉に驚く翔二郎。
当然の反応だ。

『さつき身元が分かったからな。

間違いない』

「死亡推定時刻は？」

『昨日の22時から23時だ。

ちようど、お前が水野と戦っていた頃だ』

「・・・言っておくが犯人は俺じゃないぞ」

『分かってる。

大体、死体は噛みつかれたような痕があったしな。

お前の大鎌じゃあんな痕はできない』

「噛みつかれたような痕・・・か」

『・・・まあ、今分かっている情報はこんなもんだ。

後は自分でどうにかしろよ』

と言い残し、平井は電話を切った。

「・・・行くか」

翔二郎も平井が電話を切った事を確認すると、探偵事務所のドアを開き、外に出た。

新情報編（後書き）

突然ですが問題です。

翔二郎はどこに行ったのでしょうか。

- 1・鳴海探偵事務所
- 2・情報屋の所
- 3・雷都警察署（平井が働いている警察署）
- 4・依頼人、水野亮の所

さあ、どれでしょう。

情報屋登場編（前書き）

前の話よりは長いと思います。

情報屋登場編

―同日 雷都警察署内遺体安置所 10時30分―

「・・・」

雷都署内にある遺体安置所。

ここに依頼人、水野亮はいた。

彼が見ている遺体は、水野武だ。

「・・・やっぱりにここにいましたか」

という声がした方向を向く水野。

そこには、翔二郎がいた。

「すみません。」

俺がもつと早くお兄さんを見つけていれば、間に合っていたかもしれないのに・・・」

「・・・探偵さんのせいじゃありませんよ。」

多分・・・これは天罰ですよ」

「例の『連続大学焼失事件』の犯人・・・あなたのお兄さんだったんですよね」

「はい。」

だから、これは・・・その報いだと思うんです」

「もし、そうだったとしても・・・俺は、この人を殺した犯人を絶対に許しません。」

確かにあなたのお兄さんは犯罪を犯しましたが、まだお兄さんには救いがあったはずですよ。」

俺はそう思います」

翔二郎が今言った事は本当だ。
水野武が死んだと平井から聞いた時、まだ救えた筈だったと翔二郎は思ったのだ。

それが、翔二郎の下した水野武への“判決”だ。

「それじゃ、俺はこれで」

そう言い残し、翔二郎は出て行つた。
今ここにいるのは水野だけだ。

「（・・・僕は、とんでもない“過ち”を犯してしまったんじゃないだろうか・・・）」

口には出さず、水野はそう思った。

―同日　お菓子屋『雷都堂』　11時00分―

ここは雷都にある唯一のお菓子屋『雷都堂』。

翔二郎はこの店の戸を開けた。

それに店主が気づき、声をかけた。

「ジロちゃんじゃないか。
いらっしやい」

この店主の名は“祭京子”まつじきょうこ。

若くしてこの店を開店させ、40年間無休で働いてきた女性だ。
年齢は60歳。

「何か買ってくかい？」

最近は怖いもの見たさで『雷都堂特製雷都パン』が売れてるよ」

「いや、お菓子そうちはいいよ。

今日は・・・」

言葉を切り、懷から一万円を取り出す翔二郎。

一万円に目を留める祭。

「情報屋こじちの方で、用がある」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2612x/>

仮面ライダーディシジョン

2011年12月20日17時55分発行